

文章題テスト・小説(1)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

さくら堂は、町でいちばんの大きな文房具店ぶんぼうぐで、店には消しゴムだけでも何十シユルアイとなく置いてある。色も、形も、ねだんも実にさまざまである。いちばん安いのは十円で、新五年生のチサはそれを買うお金しか持っていなかったが、買ってさっさと帰る気にはなれなかった。

ちようど店は新学期の売り出しで、子供こどもの客でにぎわっていた。みてみると、高学年の生徒で十円の消しゴムを買う者はほとんどひとりもいなかった。みんな三十円、四十円のを買っていく。今度小学校へ入学する子供でさえ、連れの母親にゴムのにおいのするのを買ってもらったりする。チサはくさ2った。なにさ、一年坊主ぼうずのくせに。一年坊主は安いのを買うべきだわ。そう思うと、ますますその十円のを買うのはいやになる。

ぐずぐずしていると、ドウキユウセイ1の女の子がひとり、ひよっこり店にやってきた。「なに買いに?」

と聞かれて、チサは、うっかり

「消しゴム買いに。」

と正直ウに答えてしまった。

「おらも。」と相手は言って、「どれにしようかな……これにしよう。」

チサは、もしも相手が十円のを選んだら、自分も「付き合うわ。」と言って、同じものを買おうと思っていたのだが、相手を選んだのは四十円の、尻しりに刷毛はけのついた上等のだった。

「チサちゃんは?どれにする?」

「おらはもう、買ったから。」

チサはあわててそう言った。きょうはもう、このまま買わずに帰ろうと思った。二人はさくら堂を出て、とちゅうで別れをツエげた。

チサは歩きながらズボンのポケットに手を入れてみた。さくら堂ではとうとう出しかねた十円玉を、なんとはなしにちよっとにぎってみたかったからである。ところが、十円玉より先に、なにやらおぼえのないものが指先に触ふれた。なんだろう。妙みょうなものが入っている。



そう思いながら取り出してみると、それは真新しい消しゴムであった。チサはびっくりして立ち止まった。

これはどうしたことだろう。チサは自分が熱オくなってくるのがわかった。

白くて、やわらかそうなはだをした、いかにも消しゴムらしい消しゴムであった。チサには、なじみのない上等品だったが、それにもかかわらずその消しゴムに見おぼえがあった。ついさっきまで、さくら堂で何度も手にとってみた五十円の消しゴムにちがいがなかった。

5 けれども、(ポケットに／どうして／入って／それが) いたのだろう。もちろん、買ったおぼえはないし、十円玉一つでは買えるわけもなかった。じっさい、十円玉はちゃんとポケットの底に残っていた。そんなら、さくら堂の品物がどうしてポケットに入っていたのか。

チサはあわてて消しゴムを握にぎりしめると、その手をズボンのポケットにかくして、そっとあたりをみまわした。自分が知らず知らずのうちにぬすみをしていたということ、その時初めて気がついたからである。

ぬすみをする気がなかったにしても、金を払はらわずにだまって店のものを持ち出したのだから、ぬすみと同じことをしたことになる。チサは体がふるえてきた。

(三浦哲郎「てつろう 小人の曲芸」)

1 線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア	イ
エ	ウ
オ	

2 線「買ってさっさと帰る気にはなれなかった」とありますが、このときの「チサ」の気持ちとしてあてはまらないものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア うれしき イ くやしき
 ウ うらやましき エ はずかしき



3 線2「くさった」とありますが、ここではどのような意味ですか。最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア あきれてしまった
- イ こっけいな気がした
- ウ 気分がめいってしまった
- エ とまどってしまった

4 線3「おらはもう、買ったから」とありますが、「チサ」がこのように言った理由として最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア はじめから消しゴムを買うつもりはなかったから。
- イ 十円の消しゴムしか買えないことを知られたくなかったから。
- ウ 消しゴムをぬすもうとしていることを知られたくなかったから。
- エ 家にもどって四十円もらってもどってくるつもりだったから。

5 線4「妙なもの」とは何ですか。文中からあてはまる部分を八字で書きぬきなさい。

6 線5の()内のことばをならべかえて、意味の通る文にするとき、いろいろな順にならべることができますが、次の□エに入る、四番目のことばは一つだけです。

- けれども、ア イ ウ エ いたのだろう。

□エ に入ることばを書きなさい。

7 線6「チサは体がふるえてきた」とありますが、このときのチサの気持ちとして最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア お金もはらわずにほしいものが手に入り、満足に思っている。
- イ 自分のしたことにおどろくと同時に、あきれてしまっている。
- ウ だれにも見られていなかったことがわかって、ほっとしている。
- エ たいへんなことをしてしまったと思い、不安におそわれている。



文章題テスト・小説(2)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

おばあさんのやせた指が、白い鍵盤けんぱんにふれたとたん、かおるはびっくりしておばあさんの手を見ました。

こんなやさしいピアノの音を、かおるは聞いたことがなかったのです。ほろほろと音は流れて、まるで煙けむりのように部屋じゅうをただよっているようでした。なんとという曲か、かおるが初めて耳にする曲でした。【ア】

かおるの耳もとで、静かな風のささやきが聞こえ、かおるはたちまち緑の草原に立っていました。草のさらさらいう音や、虫の羽音はわたがぶんぶん鳴っていました。空は白い雲がはねかえるくらい青い空で、そこを何かの鳥たちが、きしきし羽の音をさせながらいそいで飛んでいきました。最後に馬が草原をかけぬけ、ずっと遠くまで走って消えていきました。【さあ、どうだったね。こんどはあなたの番ですよ。】

おばあさんがピアノの前に立ってこういったとき、かおるははっとしておばあさんの顔を見ました。おばあさんの顔は、若々わかわかしく見えました。窓まどからはいつてくる風を気持よさそうに受けながら、おばあさんはほほえんでいました。

【さあ、こんどはわたしに聞かせておくれ、あなたのピアノを。】

おばあさんにこういわれて、かおるは魔法まじにかかったようにすっとピアノのいすにすわりました。ところが、指をピアノの鍵盤におろしたとたん、すこしもひきたい気持がないのに気づきました。

「わたし、だめです。このごろあんまりよくひけないんです。ピアノの先生もよくまちがえるっていったし、なんだか楽しくなくなっちゃったんです。」と、かおるはいいました。「それはこまったね。こんな楽しいものがきらいになったのかねえ。」

おばあさんは、もう一ついすをピアノの前に持ってきて、じぶんがすわりました。【イ】「いっしょにひいてごらん。なにもかたくなることはないんだよ。気持を楽にして。」と、



おばあさんは軽くピアノを鳴らしました。

おばあさんに手をひかれていたような気持で、かおるはひきはじめていました。でも、そのうちに、こころよくひびく音が、おばあさんのひく音なのかじぶんのひく音なのか区別がつかなくなってきました。ひきながらかおるは、じぶんの指がこんなに自由に動くのはなぜだろうと思いました。だんだん自信をとりもどすと、もうひとりでひいている気持でした。

ひき終わったとき、かおるはおばあさんの顔を見ました。【ウ】

「ちゃんとひけるじゃないかい。これからもちよいちよいいおいで、いっしょにひくのは楽しいよ。」と、おばあさんはいいました。

かおるはうなずきました。ほんとにそう⁴したいと思ったのです。

(征矢 清「かおるが見つけた小さな家」による 一部略)

1 次の文を本文中にもどすとすると、どこに入れるのが最もふさわしいですか。文中の【ア】〜【ウ】から選びなさい。

すると、そこにいるおばあさんが、もうずっと
まえからよく知っている人のような気がしました。

2 線「かおるはびっくりしておばあさんの手を見ました」とありますが、それはなぜですか。

最もふさわしいものを、ア〜エから選んで、記号に○をつけなさい。

ア ピアノをひくおばあさんの指が、あまりにもやさ細っていたから。

イ おばあさんのひくピアノの音が、とてもやさしい音だったから。

ウ おばあさんのひく曲が、かおるの知らないむずかしい曲だったから。

エ 草原にいる自分を想像していたのに、急に現実にひきもどされたから。



3 線2「ずっと」は、どの言葉をくわしく(しゅっしやく)（修飾）してありますか、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア かおるは イ ピアノの ウ いすに エ すわりました

4 線3「すこしもひきたい気持ちがない」とありますが、このあとおばあさんとピアノをひきはじめてから、「かおる」の気持ちが変わるようになって変化したかを、次のようにまとめました。①、②に当てはまる言葉を、①は十八字、②は二字で、それぞれ文中から書きぬきなさい。

ひきはじめ	おばあさんに手をひかれていいるような気持ち
中ごろ	① ②を回復 <small>(かへ)</small> していく と思う
終わりごろ	ひとりひいていいる気持ち

①

18

10

②

5 線4「そうしたい」の「そう」は、どうすることを指していますか。次の文の□に当てはまる言葉を、十字でいどで書きなさい。

おばあさんの家にまた来て、

10

こと。



文章題テスト・小説(3)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

その翌日は、朝のうちはまだ雲間から薄日が洩れていて、ぼくがゴム長をはき、傘を持って分教場へいくと、先に教室へはいつていた連中が、みんな窓から首を出して、声をそろえてぼくをはやし立てた。

「東京者は、臆病者！ 天気がいいのに傘さして！」

ぼくは、珍しくむっとした。なにか、みんなの前で失敗をしたり、みんなが容易にできることをできなかったりして、それではやし立てられるのなら仕方がないが、そうではなくて、傘をただ手に持っているだけなのに、さしているといったり、用意がいいのを臆病と取り違えたりする連中には、黙っているわけにはいかない。

そこで、ぼくはみんなの前に両手を上げて、こう叫んだ。

「ちよっと静かにしてくれよ、みんな」

みんなは、ぴたりと口をつぐんだ。ぼくがそんな演説めたことはいちどもしたことがなかったから、みんなはびっくりしたのだ。ぼくはつづけて、こう叫んだ。

「きみたちはいま、ぼくのことを臆病者といったね。だけど、ぼくは雨がこわいんじゃない、濡れたくないから、傘を持ってきたんだ。なるほどいまは降ってないけど、午後からきつと雨になるよ。ぼくにはちゃんとわかってるんだ。なんなら、雨が降り出す時間をいおうか？ それはね、午後の三時ごろだ」

みんなは、ぽかんとしてぼくを眺めていた。裏山でホトトギスが鳴いていて、その声が非常にはっきりときこえていた。ぼくは、この村にきてから、こんなに自信にミちた口調でだれかにものを語ったことが、いちどでもあっただろうか。

ぼくはちよっと調子に乗り過ぎたんじゃないかと思ったが、自分の舌の動きを止めることができなかった。われながら、偉そうな演説になってしまった。

ところが、間の悪いことに、ぼくが話し終わったとたん、それを待っていたかのように雲間から明るい陽射しが、かっどぼくらの頭上にテリつけてきた。校舎の窓という窓が、



いっせいにきらきらと輝き、校庭にぽつんと一人立っている。ぼくの影が校門の方へ逃げるように走り、みんなは急に勢いづいて、わあわあとぼくに非難の言葉を浴びせてきた。

そんな、猫が忍びこんだ鶏小屋のような騒ぎのなかから、ぴよんと校庭に跳び降りてきた者があった。中学三年の大作である。大作は、分教場では一番の大男で、鼻の下にはもうっすらとひげが生えている。中学とは教室が違うから、授業中のことはわからないが、校外活動では常にリーダーとして睨みを利かせている人物である。その大作が、ふいに窓から跳び降りてきたものだから、一瞬、ぼくは胸がどきりとした。いつかテレビで見た西部劇の決闘シーンが、ちらと頭をかすめたからだ。

「静まれ！静まれっていうに！」

大作は、腹のソコまで響くような大声で窓の騒ぎを鎮めると、みんなに向かって、

「面白いじゃないか。どうじゃろう、きょう午後の三時に、雨が降るか降らないか、このモヤシのユタと賭けをしてみんかのう」

といった。どっと賛成の声があがった。大作は、ぼくのすぐ前まで歩いてきて、見下ろした。

「どうじゃ、モヤシ。みんなもああいうてるが、賭けをしてもええな？」

ぼくは内心、困ったことになったと思ったが、いまさらあとへも退けないから、

「ああ、いいとも」

と、せいぜい胸を張って答えた。

(三浦哲郎「ユタとふしぎな仲間たち」による)

(注) 分教場…本校とは別の所にした学校、分校

線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア

イ

ウ

エ

オ



文章題テスト・小説(4)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(校内の水泳大会、百メートル自由形には五人が出場した。五年生の高木達也^{たかぎ たつや}は他の四人がすでにゴールしたのにまだヒツシ^アに泳ぎ続けていた。)

みんなはもう総立ち^{そう}だった。見ている、四年生から六年生まで百二、三十人の目が、プールの一点につきささっていた。

五年生の席から、康一^{こういち}が真っ先に飛び出した。れい子が目を真っ赤^かにして、あとに続いた。実^{みの}も雄吾^{ゆうご}も邦男^{くにお}も、いや、大矢先生^{おおや}もプールサイドにかけてきて、さげんだ。

ヨイシヨ

もう、みんなはあらんかぎりの声でほえた。自分が泳いででもいるかのように、手をふり上げた。足ふみをした。達也^{イチ}は土気色の顔をこちらに^ムけて、それでもちよつとずつ、ちよつとずつゴールに近づいていく。

校長先生の声が飛んだ。

「がんばれっ。負けるな高木。まだまだいけるぞ。」

けれども、ロープにぶつかって方こうを立て直すときには、今にもしずんでしまいそうに、ぐらつとゆらぐ。そしてまた、あのタンチョウ^ウなパチャリという音がよみがえってくる。

2 康一はじれたそうにわめいた。

「タックン。あと、あとは十メートル。もうひと息だぞ。」

しかし、その十メートルの、なんと長いことだろう。助けを、かたくなにおしのけた達也は、今まったくのひとりぼっちだった。ひとりぼっちに見えたとき、ふしぎなことに全員が乗り出したのだった。合唱^エがひびいた。

ヨイシヨッ

「もうすぐよ。」れい子は金切り声^{かなき}でさげんだが、その声は大合唱にかき消えた。れい子は、もう泣いていた。



ゴールが近づくにつれて、大合唱はいっそう高くなった。十人ほどの先生がたも、真っ赤かになってりきんでいる。見ているものにとっては、ただそうするだけしかなかった。たので。

「ぶつかるなよ。」

校長先生がどなった。けれども、達也はオーバーフローにごつんと頭をぶつけ、あきれたことにまたもよたよたとターンしようとした。

4 「あっ。」と、みんなが息をのんだ。そのようすを見るなり、校長先生はすばやくプールに飛びこんだ。細いうでを、ぐいとつかんだ。

「ばかだなあ、ぼうず。もう終わったんだ。」

達也はふしぎそうに先生の長い顔を見上げ、力なくにいつと笑った。

「よくやったぞ。」

ふんどし校長はのどにつまったような声をおし出した。達也はかすかにうなずいた。

大きな仕事をやり終わったように、満ち足りた目でもう一度うなずいてみせた。校長先生をおしのけて、自分の力ではい上がったものの、かれはふらふらとよろけた。康一がその冷えオきった親友のからだを、がっしりと受け止めた。

5 はげしいはく手が、どっとわきおこった。子どもたちみんなが笑っていた。先生がたもにこにこ手をたたいた。そのなかで、ふんどし校長だけは長い顔を天におむけて、しきりにあごをひっぱっていた。越智俊一郎おちしけんいちろうは、わけもなくふきこぼれそうになるなみだを、太陽にかわかしているのだった。

(川村たかし「ふんどし校長」による。一部省略)

(注) 金切り声…かん高い声

オーバーフロー…プールのわきにある余よ分ぶんな水みづの排はい水すい口

越智俊一郎…校長先生(ふんどし校長)



1 線ア～オについて、漢字は読みをひらがなで書き、カタカナは漢字で書きなさい。

ア

イ

ウ

エ

オ

2 線「ヨイシヨ」を、下の「y」に

続けて、ローマ字で書き表しなさい。
ただし、すべて小文字で書くこと。



3 線2「康一はじれたそうにわめいた」とありますが、その理由として最もふさわしい

ものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア 達也の泳ぐスピードがおそく、ロープにぶつかるたびにしずんでおぼれてしまうから。
- イ 達也の泳ぐスピードがおそく、助けてやりたいのに声をかけることしかできないから。
- ウ 達也がみんなのおうえんの声を聞いていないために、全然スピードが上がらないから。
- エ 達也が校長先生の教えた通りに泳いでいないために、全然スピードが上がらないから。

4 線3「よたよたと」と同じように、達也のつかれきったようすをくわしく表していることばを、泳ぎ終えたあとの場面から五字で書きぬきなさい。

5 線4『あっ。』と、みんなが息をのんだ」とありますが、その理由を次のようにまとめる
とき、に当てはまることばを、文中から十字以内で書きぬきなさい。

達也が、ゴールしたにもかかわらず、また

から。



6 線5「はげしいはく手」とありますが、どのような意味のこもったはく手ですか。最もふさわしいものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア 校長先生のやさしさと男らしい勇気のある行動をたたえるはく手。
- イ 康一や五年生の仲間全員と達也との美しい友情をたたえるはく手。
- ウ 全員が一体となって最後までおうえんしたことをたたえるはく手。
- エ 達也がおくれながらも最後まで泳ぎきったことをたたえるはく手。

7 校長先生の達也に対する言葉と、そのときの気持ちやようすの変化を次のようにまとめるとき、に当てはまるものとして最もふさわしいものを、あとのア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

「がんばれっ。負けるな高木。まだまだいけるぞ。」	はげまし、おうえんしている
「ぶつかるなよ。」	心配し、注意をうながしている
「ばかだなあ、ぼうず。もう終わったんだ。」	<input type="text"/>
「よくやったぞ。」	ほめたたえ、感動している

- ア いらだち、あきれている
- イ いらだち、ばかにしている
- ウ いとおしみ、いたわっている
- エ いとおしみ、なぐさめている



文章題テスト・小説(5)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

台風が近づいていた。古い木造もくぞうの家が、ミシミシゆれてきた。大つぶの雨が、茶の間のガラス戸に強く打ちつけている。

の夏休みだというのに、泳ぎにも行けやしない。外にも出られない。カちからがあまって、ため息ばかりついていた。

多くの名前は、黒崎くろさきタケル。小学五年生。家は、茨城いばらき県の太平洋に面した港のすぐそばで、代々、漁師りょうしをやっている。

港に船のようすを見に行った父ちゃんと兄ちゃんが、雨ガッパをびしょぬれにしてもどってきた。母ちゃんが、父ちゃんにタオルをわたしながら、心配そうにたずねる。

「港はどうだった？」

父ちゃんは、日焼けしてしわのよった顔に白い歯を見せ、おちついて答えた。

「ああ、ロープを何十本もわたして、ぜんぶの船を固定してあるからだいじょうぶだ。もうすぐ台風は行っちゃまうだろうしな。明日は、まだ波が高くて漁はできないが、あさってはでるぞ、マモル。」

かみを金髪きんぱつにそめた兄ちゃんが、「よっしゃ」とうなずく。こういう男どうしの会話って、かっこいい。「海の男」っていう感じがする。

それでぼくは、思わず父ちゃんにかけよると、まっすぐ目を見てたのんだんだ。

「じゃあ、こんどこそ、ぼくも船に乗せてよ。いいだろう？ 五年生になったんだもの！」
小さいころから、漁にでる船に乗りたくてたまらなかった。五年生の夏休みになったら乗せてやる、というのが、前2からの約束だったんだ。

「うーむ。そうだな、そろそろいいか。だが、じゃまだけはするんじゃないぞ。漁はタイミングが勝負だから。」

「はい！」³

全身がピリピリするほどうれしい。とうとう、ぼくも漁にでられるんだ！

(高橋たかはしうらら「シラス漁にチャレンジ！」より)



